第 3 回:挨拶

教場長　田中仙融

茶道では、点前を始める前に礼をし、礼をして終わります。お菓子を取るのにも、お茶をいただくにも先礼と次礼を重ね、如何にお互いを尊重しあってお茶をいただく空間に身を置くのかということを挨拶と言うことを通して教わります。しかし、実際に心をこめて誰にでも挨拶をしているのでしょうか。

小さな頃、母と家の近くを歩いていると、母は向こうから歩いて来られる着物姿の方によく会釈をしていました。そのたびに、「今の方はどなた？」と尋ねたものです。
母は決まって、「どなただからではなく、信濃町の近くで着物を来ていらっしゃる方は、お茶をなさっていらっしゃる方でしょ。ご挨拶をしなくちゃね」と存じ上げる、存じ上げないの区別ではなく、失礼があってはという気持ちで挨拶をしていました。

三徳庵が財団法人として認可されたことを祝った日のことです。参加された方々がそれぞれに、感激しあって帰途につかれたのでしょう。帰りの電車で存じ上げない方なのに、「同じ三徳庵の袋を持っている方につい声をおかけして、良かったわね」と喜び合ったのですよという話しを聞いたことがあります。知らない同士が？とびっくりしましたが、母の話しを思い出しました。

また、前会長[1]が以前研究誌の巻頭言に「挨拶」という文章を書いたものが、道徳の教科書に今も取り上げられています。挨拶という行為の中に、絶えず他の人に心を配る習慣を身につけて欲しいと考えた前会長の気持ちが、今の社会で必要な心とされているのでしょう。
それでは、前会長の目指すことをもっと身近にするようにしてみませんか？
「駅から会館への道程ですれ違う人に会釈で応える」「会館内では、たとえ名前は知らなくても同じ会員として挨拶する」「茶会などの待合いでも和やかにほほえむ」など、そこからはじめて駅の改札でも、エレベータでも人と触れあうときに心で感じた思いやりを態度に表してみたらきっと優しい雰囲気に包まれるのではないでしょうか。

平成 24 年 11 月発行　会報「えんじゅ 73 号」掲載

[1] 仙翁前会長のこと